

インタビュー

倉橋惣三先生の思い出

語り手 村田 修子
聞き手 浜口 順子

佐治由美子

村田修子^{みちこ}先生は一九四一（昭和十六）年に東京女子

子高等師範学校（女高師）の体育科に入学、卒業後

昭和二十一年から四十年間、お茶の水女子大学附属

幼稚園の教諭をされました。倉橋惣三は同大学を昭

和二十四年に退官し同時に附属園長の任も終えます

が、村田先生は、その数年間を学生・教諭として倉

橋の下で過ごされ、本誌四月号でインタビューした

堀合文子先生と同じ時代に附属幼稚園の保育を育

み、その後は洗足学園短期大学附属幼稚園で園長と

してご尽力され、保育者養成にもあたられました。

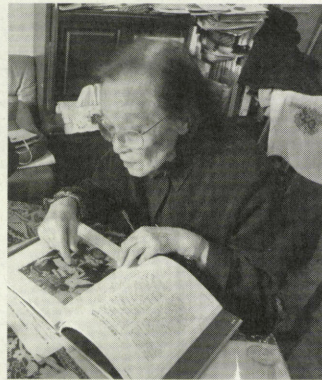
●大好きな倉橋先生

浜口 今日には村田先生に、お茶の水の附属幼稚園時代のことや倉橋先生の思い出などについて語っていただきしたいと思います。

村田 ええ、あのね、大好きなのよ、何しろ。倉橋先生が。本当にね、素晴らしい方でしたね。

浜口 直接お会いした雰囲気というのは、どういふ方だったのでしょうか。小柄な方だったそうですが。

村田 小柄だね。ごちそうが大好きな感じな……。



ぼちゃぼちゃとしていて。文句をおっしゃるようなことはなかったですね。

佐治 倉橋先生は幼稚園にはよく来られましたか。

村田 倉橋先生は教授も兼ねていらっしやいましたから、幼稚園に見えるのは一週間に二、三回でした。お話をうかがうのが楽しみでしたね。

佐治 お子さんとも遊んでいかれたのですか？

村田 ええ。でもね、（私が存じ上げていたころは）大体において足がお弱かったからね。みんなにぶら下がられると危ないのよ。だから「先生、たすけてー」っておっしゃってね。

佐治 それでお写真では座っておられるんでしょうか（附属幼稚園の記念誌『時の標』の写真を示す）。

村田 それだけじゃないと思いますよ。やっぱり子どもと対等に、同じ目の高さでね。

浜口 附属幼稚園の保育のやり方というのは、そのころから、朝登園するとすぐにほとんど自由に好きなように過ごして、お弁当を食べて、午後また少し

遊んだらお集まりをして帰る、という一日の流れだったのでしょうか。

村田 ええ。クラスの色彩っていうのはありましたけれどね。

浜口 先生方同士の話し合いというのは、どのようにされていたのですか？

村田 それもありましたけれどもね。「ここがわからなかったけれど、それはどういうわけ？」とか聞いたりしてね。

佐治 そういう話し合いをする時には倉橋先生も入って一緒になさったのですか？

村田 そういう時もありましたね。及川（ふみ）先生が入られる時もありましたしね。……でも倉橋先生の時は楽しかったわね。特別に先生がどうこうしたっていうんじゃないけれど、何となくおらかな空気が漂っていたように思うのよね。倉橋先生がちゃんと及川先生のことを立ててね、及川先生のほうが偉いような感じだったわよ。

浜口 村田先生は、戦中、敗戦、戦後復興にまたがる時代の倉橋先生を見ていらしたわけですが、そういう張り詰めたものは感じましたか？

村田 いえ、あんまり感じなかったですね。

浜口 じゃあ、いつも穏やかで……。

村田 ええ。そんなにね、深くお話しする方じゃないんですけど、幸せなことにね、私は先生の中野のご自宅によく伺いました。倉橋先生の最初の男のお孫さんがね、うちの娘と同じ日（昭和二十四年八月二十五日）に生まれたの。

佐治 そうですか！

村田 こっちが女で、あちらが男。だからね、倉橋先生が比っこするのよ！ 私は初めての子ですしね、そんな比べるなんて思わないけれどね。先生は「こっちはこうだけれどね、そっちはそんなことまだできないかもしれないけど」なんて、笑うんです。けれどね。女の子のほうがどうしても大きいんですよね。そうするとね、残念がるのよ。負け

たーって言ってるね。それがうれしいわけじゃないけれども、何となくね。

佐治 お忙しい中で癒やされていらしたのかもしれないですね。

浜口 奥様はとっても楽しい方だったそうですね。

村田 本当に楽しい方。あの方は東京府立第一高等女学校卒で、私の先輩なんです。そういうことがあつてよく話しましたね。

浜口 先生は体育科にお入りになったということ、初めから幼稚園の先生を目指しておられたわけではないのですか？

村田 ええ。私は一人っ子で、娘も一人。だから、ちいちゃい子ってよく知らないのよね。でもそれが子ども好きになったのよね。それはとってもよかったですと思う。女高師にいた時に、幼稚園を知ってはいませんでしたね。そんな魅力はなかったです。でも倉橋先生の授業に好んで出ていましたね。いつも、一番前に行つて聞いてね。

● 附属幼稚園で

浜口 先生のお宅のお庭のように、幼稚園のお庭にもたくさん植物が植わっていますけれど。

村田 そうそう。お庭のね、(高台の)山のほうへ上る傾斜の所を子どもが使えるようになって考えました。ああいう木々の間を歩き来することは少ないですもんね。坂があると何となく上りたくなるのは当たり前なんですよ。

浜口 たとえば、秋にはイチヨウの葉っぱでどんなことをされましたか。

村田 あれをたくさん集めて子どもにワーツとかぶせるとね。うるさいけれどもうれしいのよね。そういうことが自分の経験でとても楽しかったからね。自分が楽しかったことって子どももやっぱり楽しいだろうってね。

浜口 あの当時、お茶大の学生さんが幼稚園の朝のお掃除をしていたということはありますか？ 実

習の一環で、朝早くから来て。

村田 ああ、そういう時もありましたね。そういうのが実習期間の初めのころとくつついて、そこから始まつたり。

浜口 学生さんが実習する姿で、印象に残っていることとかはございますか？

村田 いろいろありますけれどね。実習をとっても好きな人と、そうでない人は来る回数が違います。休みの時間があれば来るといふ人もいました。

浜口 いまの教育実習と比べると、かなり自由に入りできたんですね。

村田 そうなの。配属の組は決まっているから、先生も安心してね。そういうのっていいのよ。

浜口/佐治 いいですね。

村田 だって学生さんの空いた時間っていうのは、その人によって違うでしょう？ だからその都度先生に届けを出して来る人もあつたし、ぴよこんと来る人もあつたし。

●保育とは

浜口 四十年の中で、子どもとのかかわり方について、だんだんわかつていらしたことはありますか？

村田 ありますね。それはいっぱい。

浜口 どんなことでしょうか。

村田 放っておく、っていう言い過ぎだけでもね、曲がりそうになった時を見計らってこうやってピッとすればね。

浜口 なるほど。あまり手をかけ過ぎない。

村田 あんまり口で、かけないほうがいいわね。

浜口 心で、かける。

村田 もちろん心だけれど、ピッとやって、ニコッと笑ってやればいいんじゃないかしら。やっぱり笑顔っていうのはいちばん効くんじゃないかしら。

浜口 子どもを遠くから見守る保育と、一緒になって遊ぶのと、先生ご自身はどちらが主でしたか？

村田 私はその中に入ってしまったて。

佐治 たとえばさっきの話のように、イチヨウの葉っぱをワーツとかけたりするのは、本当に子どもと一緒に遊ぶ気持ちがないとできないですよ。

浜口 逆に、いまは離れていようという時は？

村田 ありますよね。やっぱりその子がやろうとしていることがもう見えて、安心していられる時にはね。安心していられないとやっぱり心配で。ずっと見つめていたりね、ちらちら見ていたりね。チョコッと手を出したりね。

佐治 子ども同士で遊び始める雰囲気になったら、それまで一緒にいてもスッと離れてみたりとかなさるのでしょいか。

村田 そういう時もあるし、一緒になって中に入っで遊ぶ時もありますね。そのほうがいいと思えばね。その時の判断がつくかつかないかというのは大きいでしょうね。

浜口 それはなかなか学生さんに教えられることじゃないですね。

村田 だからそういう例があった時に一つそれをつかまえて、ここは今日はそのままにしちやっただけで、違うふうにもできたかもしれないわねって言ってあげればわかるかもしれない。そうやった時にどう変わってきたかを一緒に考えてみるのもいいわね。

浜口 誘導保育という言葉がありますけれど、かなり意識していらしたんでしょうか？

村田 意識してはいないけれどそうなっちゃうんですよね。何か関係がつきそうなおことが出てきてね、それをさっきのこととつなげて……とかね。

浜口 やってみたら、後からあれは誘導保育だったといえるような感じですか？

村田 そういう時もありますよね。子どもがしていたことをうまく流れれば、そこからどっちにでもいけるようになることもあるんです。そうするとああうまくいったなと思ってね。あそこでこうしなければよかったのかなって思ったり。子どもには言わなけれどね(笑)、成功ばっかりではないわね。

浜口 そうすると、一つの流れがあつて、子どもが参加してまとまったものになっていくということがよく起こったということですね。

村田 そう。やった！ って思ってたね。ああこうなるのか、よかつたって。でも何としたって、こうなつてよかつたつて思えるようにもつていかないといけないんだからね。後悔ばかりしていたって仕方ないのよ。

* * *

都内にある村田先生のご自宅の庭には、折しも赤々と実がたわわに数十個なっている柿の木がありました。先生は「さあ、幾つあるか当ててみましょうよ！」と楽しそうに言われ、そこに保育者の村田先生の姿が重なつて見えた気がしました。玄関前の珍しい「キンギョつばき」の葉つばと柿の実をいただいて帰りました。

浜口順子・佐治由美子（お茶の水女子大学教員）

記録・金子未希（お茶の水女子大学大学院生）